

菅原道真研究

『菅家後集』全注釈(十一)

焼山廣志

一

前回①に引き続いて、本稿では以下の『菅家後集』の作品の全注釈を試みたい。今回は調査・考察を済ませた『菅家後集』「510問秋月」「511代月答」の二首を取り挙げてみる。

注釈を進める上での「凡例」は前稿②のそれに倣う。

二

本文

平仄

510
問秋月*

・度春度夏只今秋
・如鏡如環本是鉤
●○○●●○○○
○○○○○○●○

校異

・爲問未曾失終始
・被浮雲掩向西流
●●●●○○○
○○○○●○○○

*脚韻は下平声「尤韻」 韻字は「秋・鉤・流」である。

○題字下注「七言」：(大島)(松平)(尊四)

▼頭注「無七言二字」：(大島)

○失：告(●)(内一)(静嘉)(影考)(尊一・底本)(尊二)(尊三)

▼頭注「失作告」(大島)

○被浮雲掩：被掩浮雲(●●○○)(尊四)

▼頭注「被浮雲掩作被掩浮雲」(大島)

訓読

・春を度り夏を度りて 只今は秋
・鏡のごとく 環のごとくにして 本は是れ鉤なり。

- ・ 為に問ふ 未だ曾て 終始を失はざるに
- ・ 浮雲に掩はれて 西に向かひて流るるを。

通釈

- ・ 月よ、お前は、春を過ぎ、夏を過ぎし今しがた秋を迎えているのだな。

- ・ そのお前の姿は（時に満月を迎え）鏡のようでもあり、壁のうでわのように見えるがもとは釣針のように三日月形の細く曲がつていた事もあったよな。

- ・ ところで、お前に聞きたいのだが、いままで終始一貫して、一度もその運行の狂いを見せたことがないはずなのに

- ・ （今、どうして）浮き雲に光をさえぎられ、西に流されて行くとしてゐるのかい。

語釈

○秋月：秋の月、「江淹、別賦」に「至乃秋露如珠、秋月如珪、明月白露光陰往、來」の句が、「陶潜、四時詩」には「春水滿四澤、夏雪多奇峯、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松。」の句が、「岑參、巴南舟中夜市詩」には、「孤舟萬峯外、秋月不堪論」の句が、見える。「杜甫、十七夜對月詩」には「秋月仍圓夜、江村獨老身」の句が、又「元稹、夜閑詩」には「風簾半鈎落、秋月滿床明」の句が、「白居易、八月十五日夜聞崔大員外翰林獨直對酒翫月因懷

禁中清景、遇題是詩」に「秋月高懸空碧外、仙郎靜翫禁闌間」の句が見える。

【参考】『日本漢詩人選集1 菅原道真』の中で小島憲之・山本登朗氏はこの道真の「510問秋月」の詩題について【次のように言及されている。

（二七一―二七二頁）

秋の月を擬人化し、それに問い掛けた作。次の「代月答」と二首で一対の問答の形をなす。自然の景物を擬人化してそれに問いかける形を取った作としては「白詩」に「山中問月」（0980）「問秋光」（2278）など類似の例があるが、さらに「白詩」には「代春贈」（0915）と「答春」（0916）「問鶴」（3157）と「代鶴答」（3158）等、二首一対の問答の例も見える。本詩はそれらにならって作られたもの。なお、道具は自然の景物を対象にしてはいないが、同じように「白詩」にならって問答の形をとった作（問蘭筍翁）「代翁答之」「重問」「重答」を以前にも作っている。

○度……わたる。わたす。「渡」に通じる。「漢語大詞典」には「通〈渡〉。過江湖。用千空間或時間。」と説明し、

「王之渙・涼州詞之一」の「美笛何須怨楊柳、春風不度玉門關」の例を挙げる。

○只今……ただいま。現在。『漢語大詩集』には「如今、現在」と説明し、「李白・蘇台覽古」の「只今惟有西江月、曾照吳王宮裏人」の例を引く。同じく「李白・越中覽古」に「宮女如花滿春、只今惟有鷓鴣飛」の句が見える。「杜甫・醉歌行」にも「只今年纔十六七、射策君門期第一」の句が見える。同じく「杜甫・樂遊園歌」に「只今未醉已失悲・數莖白髮那拋得」の句がある。『田氏家集』「春日假景訪同門友人」に「只今鄭重來相訪、爲是同門契斷金」の句が、又「台山絶頂」に「惆悵貴人無到日、只今猶合傲王侯」の句が見える。『菅家文章』「272驚冬」に「送冬如昨只今歸、鷹道炎涼傳翼飛」の句を、又「323春日感故右丞相旧宅」に「只今暮宿簷間鳥」の句を見出せる。

○環……たまき。瑞玉の名。円形で中に円孔あり。孔の半径と辺の幅との等しいもの。円くて窮り無いの意。又帰るの意に象る。満月の形を「環」にたとえる。

『漢語大詩典』には「璧的一种、圓圈形的玉器」と説明する。

○爲問……問う。質問する。『日本漢詩人選集Ⅰ 菅原道真』には「問う、尋ねるの意。『白詩』に多く見られる俗語的表現」との説明がある。(一七三頁)「杜甫・述古三首之一」に「悲鳴淚至地、爲問駭者誰」の句が、又「杜甫・因崔五侍御寄高彭州」に「爲問彭州牧、何時救急難」の句が見える。「白居易。賦得聽邊鴻」に「爲問昭君月下聽、何如蘇武雪中聞」の句が、又「寄李蘇兼示楊瓊」に「爲問蘇臺酒席中、使君歌笑與誰同」の句が見える。又類似的詩題を持つ「白居易・山中問月」にも「爲問長安月、誰教不相離」の句が見える。

↓ 補説 参照

○失終始……始めから終わりまで一貫して変らない事を失ってしまうこと。変節してしまうこと。「終始」は、「始めから終わりまで」とか「始めから終わりまで一貫していること」の意。『漢語大詞典』では「自始至終、一直」と説明し、更に「終始不渝」の項では「自始至終、一直不變」との言及が、又「終始若一」の項では「自始至終都不改變」の言及がある。先述の**校異**の所で触れているが、底本として「尊経閣所蔵本(甲)」を始め、写本のいくつかは「失」を「告」としている。「告」には「つづける。つづの訓で、表明する、示す」の意がある。例えば『荀子』『礼論』

に「興藏而馬友、告不用也」の例が見える。(車を埋葬して馬をもどすのは、軍備として使わない事を示すのである。)『漢字海』「告」の説明文引用)。
とすれば、「告終始」は「始めから終わりまで一貫して変らないことを示す」の意となり、その上の二文字「未曾」が「今まで一度もくはない」の意だから「今まで一度も、始めから終わりまで一貫して変らないことを示したことはなかった」との解釈となり文意が通じない。故にここでは底本等の「告」を取らない。

○浮雲……うきぐも。『漢詩大詞典』には「○飄動的雲」と説明し、『楚辭』「九辨」の「塊獨守此無澤兮、仰浮雲而永歎」の例を引く。一方、『大漢和辭典』には「五小人の喩」との説明があり、「李白・登金陵鳳凰台詩」の「總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁」の用例を引く。『漢語大詞典』でも『浮雲蔽日』の項で次のように説明する。

『語本』「文子・上德」日月欲明、浮雲蓋之、后喩、佞奸之徒、蔽君之明。

つまり「浮雲」とは、「佞奸の徒(へつらい邪な輩)」の喩えであり、君子に邪な考えを吹き込もうとする輩のことだと説明する。傾聴すべき説明である。道

真の詩句での使われ方も、この意が込められていると考えたい。

単なる「空に浮かぶ小雲」の描出だけではない。

○西流……西に流れること。西方の大宰府に左遷させられている道真の現況を暗示している。

補説

◎「110間秋月」に投影の指摘できる『白氏文集』

語釈 「為問」の所で言及したが、この道具の詩には発想、措辞の点で次に挙げる『白氏文集』中の詩に類似点を多く指摘することが出来る。

0980 山中間月

山中 月に問ふ

爲問長安月

爲に問ふ 長安の月、

誰教不相離

誰か相離れざらしむ。

昔隨飛蓋處

昔は蓋を飛ばす處に隨ひ、

今照入山時

今は山に入る時を照らす。

借助秋懷曠

借助して 秋懷曠しく、

留連夜臥遲

留連して 夜臥遅し。

如歸舊鄉國

舊郷國に歸るが如く、

似^に對^{たい}好^{こう}親^{しん}知^ち
松^{しょう}下^か行^{ゆく}爲^{ため}伴^{ばん}
谿^{せき}頭^{とう}坐^ま有^あ期^き
千^{せん}巖^{がん}將^{じやう}萬^{ばん}壑^{たつ}
無^な處^ち不^ふ相^{さう}隨^じ

好^{こう}親^{しん}知^ちに對^{たい}するに似^にたり
松^{しょう}下^か行^{ゆく}く^く伴^{ばん}を爲^なし
谿^{せき}頭^{とう}坐^まして期^き有^あり
千^{せん}巖^{がん}と萬^{ばん}壑^{たつ}と、
無^な處^ちとして相^{あい}隨^じはざるは無^なし

通 釈

長安でもなじみだった月に問うが、一体誰がお前に、私のそばを離れさせないようにしたのだい。昔はお前は私の車の行く処に随つてついで来たが、今も盧山に隠棲する私を照らしている。お前のおかげで私の憂愁はいよいよ大きくなり、お前がぐずぐずしているのも夜もなかなか横になれない。お前を見ていると、私は昔の故郷に戻ったようであり、仲のよい旧友に相對しているような気がする。松の下を散歩すれば私の道づれとなり、谷のほとりに坐れば、約束していたように出て来る。松が多くの山や谷を散歩しても、ついて来てくれない処とてない。実に切つても切れない友である。

『新釈漢文大系』 白氏文集 三 』
427 』
428 頁

元和十二年（八一七）白居易、四十六歳。江州司馬時代の作品と言われる。前述したように「問秋月」という詩題、一句目の「爲に問ふ、長安の月、誰か相離れざらしむ」の表現に類以点は指摘出来るものの、诗情は道真の句とは大きくかけ離れ

○半(●)：平(○)(尊一)右に「イ半」と傍注する。

ている。つまり、白詩からの措辞の投影にとどまる作品といえる。

平仄

511
代月答

*脚韻は下平声「先」韻。韻字は「圓・天・遷」である。

○題字下中「七言」：（内一）（松平）（尊四）（太二）（大島）

○香(○)∴芳(○)(内一)(松平)(尊一)(尊二)(尊三)

▼頭注「香作芳」(大島)

○半(●)：平(○)(尊一)右に「イ半」と傍注する。

○且(●)：▼頭注「且作具」(大島)

○廻(○)：▼頭注「廻作廻」(大島)

訓読

- ・莫發^{ひひ}き 柱^{はしら}香^{かほ}りて半^なば 且^まに圓^まならんとす
- ・三千世界 天^{あめ}を一周^{いちしゅう}す
- ・天 玄鑑^{げんかん}を廻^{めぐ}らして 雲^{くも}將^{まさ}に霽^はれんとす
- ・唯^{ただ}是^{こゝ}れ西^{にし}に行くのみ 左遷^{させん}にあらず

通釈

月に代わって答えた詩

- ・私の月の世界では莫莢が一莢ずつ生え始め、桂樹芳しい香りを漂わせるようになり、漸く半月を迎え、今まさに満月になろうとしている。
- ・私はこの三千世界、天を一巡りしようとしているのだ。
- ・天は鏡のように優れた見識を駆使した結果、私をおおっていた雲は今まさに消え去ろうとしている
- ・私はただ西に向かおうとしているのであって、左遷されてそうしているのではないのだ。

語釈

○莫莢：瑞草の名。堯の時、生えたという。月の一日から十五日まで日毎に一莢つつ生え十六日から晦日まで毎日一

莢ずつ落ち始めたので、これに依って暦を作ったという。こよみぐさ。曆莢。『玉篇』に「莢、莫莢也、曆得其分度、則莫莢生於階、月一日一莢生十六日一莢落」とある。『漢語大詞典』には「古代傳說中的一种瑞草、毎月從初一至十五、毎月結一莢、從十六至月終、毎月落一莢。所以從莢數多少、可以知道是何日、一名歷莢」と説明する。↓補説 参照。『田氏家集』「68翫片月」に「莢生七莢未盈旬、雪際分明出半輪」の句が見える。

○桂香：桂樹の香。「庾信・山中詩」に「潤暗泉偏冷、巖深桂絕香」の句が見える。『漢語大詞典』では「⑦傳説月中有樹曰桂、因以桂代指月亮」と説明し、「元稹、賦得數莢詩」の「桂滿叢初合、蟾虧影漸零」の句を引く。類語に「桂草」がある。この語の用例としては「菅家文章」「385月夜翫櫻花、各分一字、應令一首」に「芳氣近從階下起、莫言天上桂草開」の句が見え、又『菅家後集』「484敍意一百韻」に「一逢蘭氣敗、九見桂華圓」の句が見える。↓補説 参照

○三千世界：(小)小千世界、中千世界・大千世界の称。須弥山の周圍に七山八海があり、その外を大鉄圍山が囲んでいるのを一小世界とし、小世界一千を小千世界、

える。

小千世界一千を中千世界、中千世界一千を大千世界とする。三千大千世界の略。『釈氏要覽』に「此山（須弥山）有八山遶外、有大鉄圍山、周廻圍繞、并一日月昼夜回轉、照四天下、名一國土積一千國、各千小世界、積千箇小界、名中千世界、積一千中世界、名大千世界、以三積千、故名三千大千世界」の記事が見える。『漢語大詞典』では「三千大千世界的省称」との説明があり、「三千大千世界」の項には「仏教名詞、簡稱『大千世界』。以須弥山爲中心七山八海交繞之、更以鉄圍山爲外郭、是謂一小世界、合一千個小世界爲小千世界、合一千個小世界爲中千世界、合一千個中世界爲大千世界、總稱爲三千大千世界」と説明する。「劉禹錫、福千寺雪中酬別樂天」に「二人笙歌雪幕下、三千世界雪花中」の句を引く。『白氏文集』「3361春日題乾元寺上方最高峰亭」にも「危亭絶頂四無鄰、見盡三千世界春」の句が見える。

『田氏家集』には「53春日雄山寺上方遠望」詩に「今朝無限風輪動、吹綻三千世界花」の句を見出せる。『菅家文集』「300路次見芭蕉」にも「三千世界空如是、所以停鞭泣馬頭」の句が見える。類似表現の作品として同じく『菅家文集』「117夢阿滿」に「到處須弥迷百億、生時世界暗三千」の句が見

○玄鑑…玄妙な鏡。人の心を言う。『漢語大詞典』には「猶明鏡、喻高明的見解」と説明し、『淮南子』「脩務訓」の「誠得清明之士、執玄鑑於心。照物明白、不爲古今易意、高誘注、玄、水也、鑑、鏡也」の記事を載せる。『白氏文集』「意孫蒸贈陸士龍」詩に「明明大象、玄鑑照微」の句が見える。『菅家文集』「98有所思」に「明神若不愆玄鑑、無事何久被虛詞」の句が見える。『日本漢詩人選集Ⅰ 菅原道真』では「すべてを映し出す玄妙な鏡。ここはあらゆるものを見通すことが出来る天の力を言う。〈廻玄鑑〉は、そのような洞察力を発揮すること。」との説明がある。（二七五頁）

○霽……はれること。

↓ 補説 参照

○西行…西方に行く。『菅家後集』「477詠樂天北窓三友詩」に「東行西行雲眇眇、二月三月日遲」の句が見える。

○左遷…官位を降しおとす。官を卑しくして遠地に流す。貶謫。左降。『淮南子』「繆稱訓」に「故人左遷、則失其所尊也。」の記事が見える。又、『漢書』「周昌傳」に「吾極知其左遷〔注〕師古曰、是時尊右而卑左、故謂貶秩

位、爲左遷」の記事が見える。『漢語大詞典』では「降官、貶職」と説明し、「柳完元・送李渭赴京師序」の「過洞庭、上湘江、非有罪左遷者罕至」を引く。「李白・自漢陽病酒歸寄王明府」にも「去歲左遷夜朗道、琉璃硯水長枯槁」の句が見える。『白氏文集』にも散見する話。例えば「馬上作」の「何言左遷去、尚獲專城居」などがそれである。

補説

◎一句目「萸發桂香半且圓」の出典考

『初学記』の「月」の項の次の一文に拠ると考える。

▼月第三

〔事對〕 觀萸 視桂

抱朴子曰、昔帝軒候鳳鳴以調律、唐堯觀萸、萸以知月、帝王世紀云、堯時有草夾階而生、每月朔日生一萸、至月半則生十五萸、至十六日後、日落一萸、至月晦而盡、若月小餘一萸、王者以是占歷、應和而生、以爲堯瑞、名之萸萸、一名歷萸、一名仙茆、虞喜安天論曰、俗傳月中仙人掌樹、今視其初生、見仙人之足、漸已成形、桂樹後生。

『初学記』 鼎文書局版 八頁

◎三句目「天廻玄鑑將霽」の表現の意図するものについての考察

三句目「天 玄鑑を廻らして 雲將に霽れんとす」は、月にかかっていた雲が、今消え去ろうとし、月本来の明るい光を取り戻しつつある景を詠んでいる。これは前詩「510間秋月」の四句「浮雲に掩はれて 西に向かひて流るるを」を受けての答えになっているのは自明だが、ここで留意したいのは、この三句目の「天廻玄鑑」の四文字である。この語句の意味については語釈で触れた所で重複は避けるが、道真が敢えて「雲が消えて月光を照らし出す状況」を描くのに、「天が、玄鑑を廻らした結果だ」と説明する意図は、「510間秋月」の四句目「浮雲」の語釈で言及した「浮雲」の二義的な意「佞奸の徒」を天が公正な見識でさばいたことを暗示しているところにあると考える。

つまりこの詩の詠作されたのが、道真の亡くなる前年の秋と考えるならば、道真自身の今の現況からして京に戻れる望みは、絶望的となりつつあることを自覚し、諦念と仏教への傾倒が目立って来たことを窺わせる作品が増えている流れの中でこの詩句の意を考える必要がある。その道真にとつてどうしても訴えておかなければならない事は、「自分は無実である」「自分の身は潔白である」「自分は冤罪でこの太宰府に放逐されたのだ」という事実には他ならない。このことを万人に訴えずにはやすや

すと命を落とせぬという気概が、この詩句にはこめられていると見たい。

「浮雲」が消え去り「月光」が戻るというのは、明晰な天子の判により、道真自身を太宰府の地に追いやった邪悪な輩が排斥され、国の政が正しきに返るということ。そして道真の最大の願いである「自分自身の無実が証される」という事態が必ずや訪れる、いや訪れなければならないという強い思いを「月」に託して詠いあげていると考えたい。だからこそ四句目「唯是れ西に行くのみ 左遷にあらず」と「左遷ではない」と「月」に断言させているのではないか。

◎「511代月答」全般についての解釈考

▼表現技法の視点から藤原克己氏は『菅原道真と平安朝漢文学』の中で次のように言及されている。

五『菅家後集』の表現世界

道真の詩における比喩表現を考えるうえで、どうしても看過しえないものに 仮に「比喩興的寓意感托表現」とでも名づけておきたいような性質のものがある。(中略) 風騷、すなわち『毛詩』や『楚辞』においても美刺諷諫の機能を果たしていた比喩興的寓意感托表現(中略)道真も「比興」という言葉は用いていないものの、かの「未旦求衣賦」(『文

草』卷七・五一六)の序で、詩賦は一文一字も現実を逃避した閑文字であつてはならない。たとえば「寒霜晚菊」といった風物を詠むにしても、それに托して風霜に耐える貞節の志を述べるといったものでなくてはならない、と言いつ、実際にそのように草木鳥虫に寓意感托した詩を、少なからず詠作しているのである。

(Ⅲ 菅原道真の詩と思想 二八八頁)

その例示として「510問秋月」と「511代月答」を挙げている論述に筆者も同感である。道真の緊迫した心情を「月」に仮託して詠いあげていることの考察は先に記した通りである。

▼川口久雄氏は、日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』の頭注で次のように言及されている。

無実を天道に訴えている。流謫・左遷は私にはいわれのないことだということを月に託して叫びあげている。

(五二三)頁

▼小島憲之・山本登朗氏は『日本漢詩人選集Ⅰ 菅原道真』の中で次のように論じられている。

さまざまに形を変える中で一貫した姿勢を貫いているにもかかわらず、雲に覆われて西に流れている雲のありさまは、諷言によって西方の太宰府に左遷・流罪となった道真の運命とよく似ている。だからこそ作者は、月に呼びかけ、その理由

をたずねようとする。(中略)作者は、月の姿に自分を重ね合わせながら、天をゆく雲と地上の自分の運命の根本的な違いを確認して自問自答の作をとじる。道真ははたして、自分に対して「玄鑑」がめぐらされ、覆っている雲もやがて「霽^はれると確信していたのかどうか。詩作は、これ以上のことを語ってはくれない。(一七三―一七五頁)

筆者は、この詩を『菅家後集』の一連の詩作品の中で再度吟味する必要があると考える。この作品の直前の詩は「508 燈滅二絶」―「509 燈滅二絶」の連作である。この二作については筆者は既に試読したものを公にした。³ その内の、二首目「509 燈滅二絶」を再度取り上げてみる。

「秋天未だ雲あらず、地に螢無し／燈滅して書を擲^{なげ}てば、涙暗に零^おつ／遷客の悲愁、陰夜に倍す／冥冥の理 冥冥に訴へんと欲す」と詠む。とりわけこの詩の三・四句目「遷客の悲愁、陰夜に倍す／冥冥の理 冥冥に訴へんと欲す」の表現内容に注目したい。「左遷の憂き身の悲しみは(灯明も消え)月も出ていない暗夜には、とりわけ深まるものである。／この胸奥にわかかったまま誰にも話せない事の真実は、はるかなる天に解き明かしてもらいたいと切に願うばかりだ。」と心情を吐露する道真が、時移り、満月の月に対し「511 代月答」の三・四句目で「天は鏡のように優れた見識を駆使した結果、私をおおっていた雲は今まさに消え去ろうとしている／私はただ西に向かう

としているのであって、左遷されてそうしているのではないのだ」と詠む心情の流れを考えれば、そこに自と道真の真意が見えて気はしまいか。

つまり、今の道真の願いは「左遷ではない」「無実である」ことの証が公にされる事、その一点に尽きるのである。そして冤罪が晴れた後に京に戻るかもしれないという期待感、この期に及んだ道真にとつて副次的なものでしかなかったように思える。

それを証明出来るのは、とりもなおさず天子、つまり「天皇の明晰なる判断」に全てが掛かっている事を訴えたいが為に、それを直接的に語句に摂り入れることのはばかりから、「月」に仮託する形で自分の心情を表明しているものと考え。「月」と「自分(道真自身)」の対比ではなく、「月」そのものに「自分」を仮託して詠いあげている作品と考える。

【注】

- (1) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十)」
(『有明工業高等専門学校紀要』四十一号)
- (2) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(一)」
(『国語国文学研究』第三十六号) 熊本大学国語国文学学会
- (3) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(五)」
(『国語国文学研究』第三十七号) 熊本大学国語国文学学会

【追記】

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大の御助力をいただいた。とりわけ、語釈、『白氏文集』の詩語の検索などにお力添えを頂いた事に感謝申し上げます。

又、台湾元智工學院の中國古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀 (BIG5)」(<http://dsadmin.yzu.edu.tw/>) の『全唐詩』の項、及び北京大學中文系の唐代以前の詩歌の總合データベースである「全唐詩全文檢索系統 (UTF-8)」(<http://chinese.pkucn/cgi-bin/langlibrary.exe>) を詩語檢索のために利用した。

(やきやま ひろし／大学院七回修了・有明高専)